

菊

種

延命

代袋

假名恒

魯文園

久保田

彦作編



梅堂國政画

大倉孫吉書

壽梓

35

30

25

20



菊種延命袋衣初編

初編上

御届 明治十一年十月 日

日本橋通一丁目十九番地

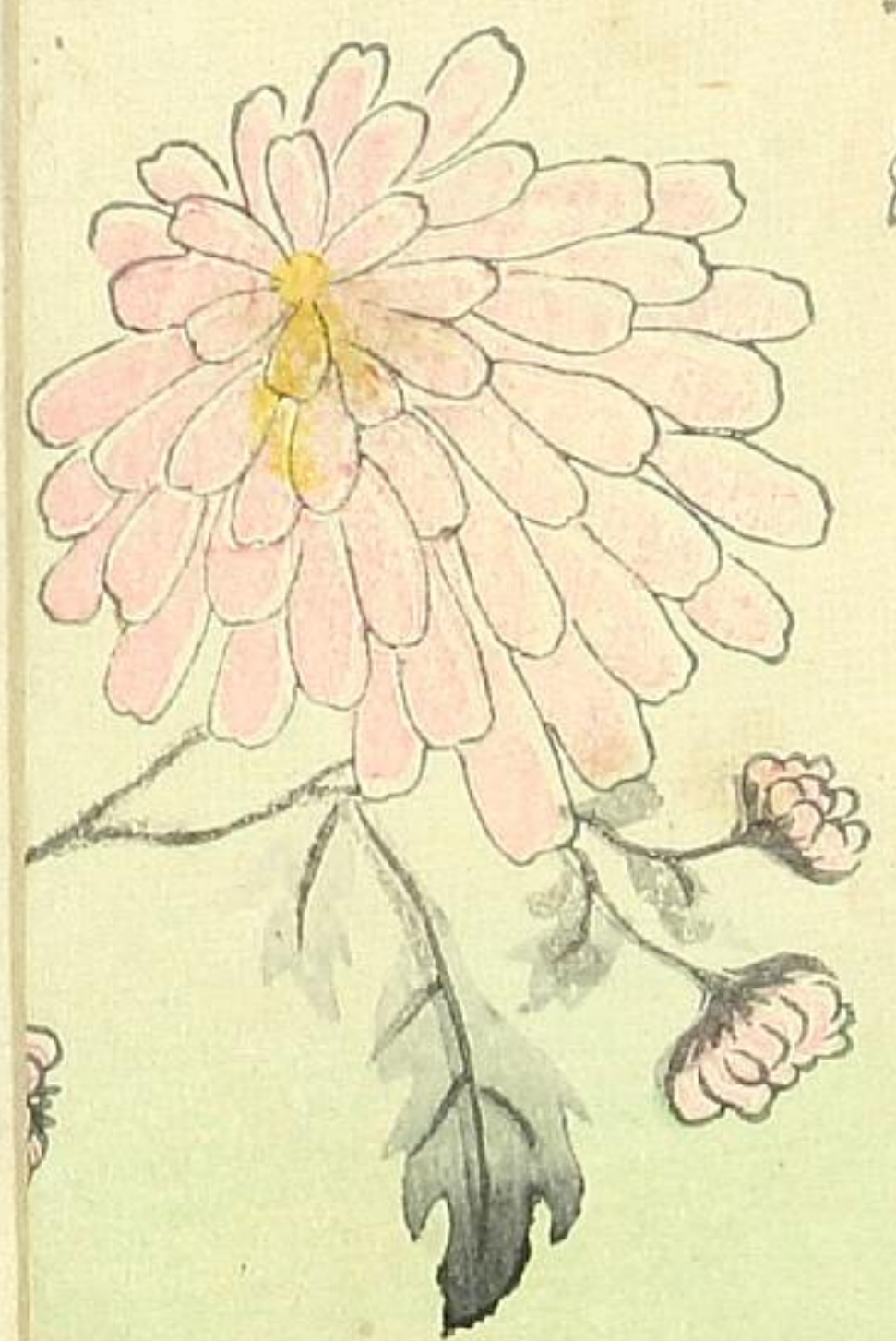
出版人 大倉孫兵衛

編輯 久保田彦作

画工 梅堂國政

48-8089

七色より好くそ葉造らふと思ひたりとこどもな
 名白の速に造らるる時このひまこそは延命えんめいの神かみなり
 梨園りえんより松葉しょうえ河舟かぶねが此男このおとこの造り業わざを
 大より織子おりのこ思ひを起せしこそはあなね採ねハ
 拙さ中ちゆうに造られたの延命えんめい造り松まつをせしは
 昔生むかしうまの赤あか菊きく此この赤あか心こころより造らるる
 源げん々げんも時ときり候うわさるる
 定めしな心こころの程ほどしき
 いのちく神かみさへ多あやかりしむ
 到いた捕とを申まをすか一ひとお祈いのり



妻つまぐらえいへん
 早はや茶ちや葉えの初はつ編へん
 三冊さん延命えんめい造ぞうの
 幼おとききささららり
 勢せう程ていの池いけと
 大おほいいなな潮うしほのつが
 遠とほききの酒さけを
 編へん者もの一ひと探たづね
 過すかししにに候うわさるる



久保田彦作記
 〇

菊
 二

妙策空
法庭小理
非と明断を
股阪侯の
英智

新和の各奉行
股阪侯の守

大徳丸八郎
後中老氣村

旧暮の家人森野元次郎
後非人東六



百重衣

安永七年二月

毒屋町

而打座

鳥と虫の助

十入歳

と初

舞臺

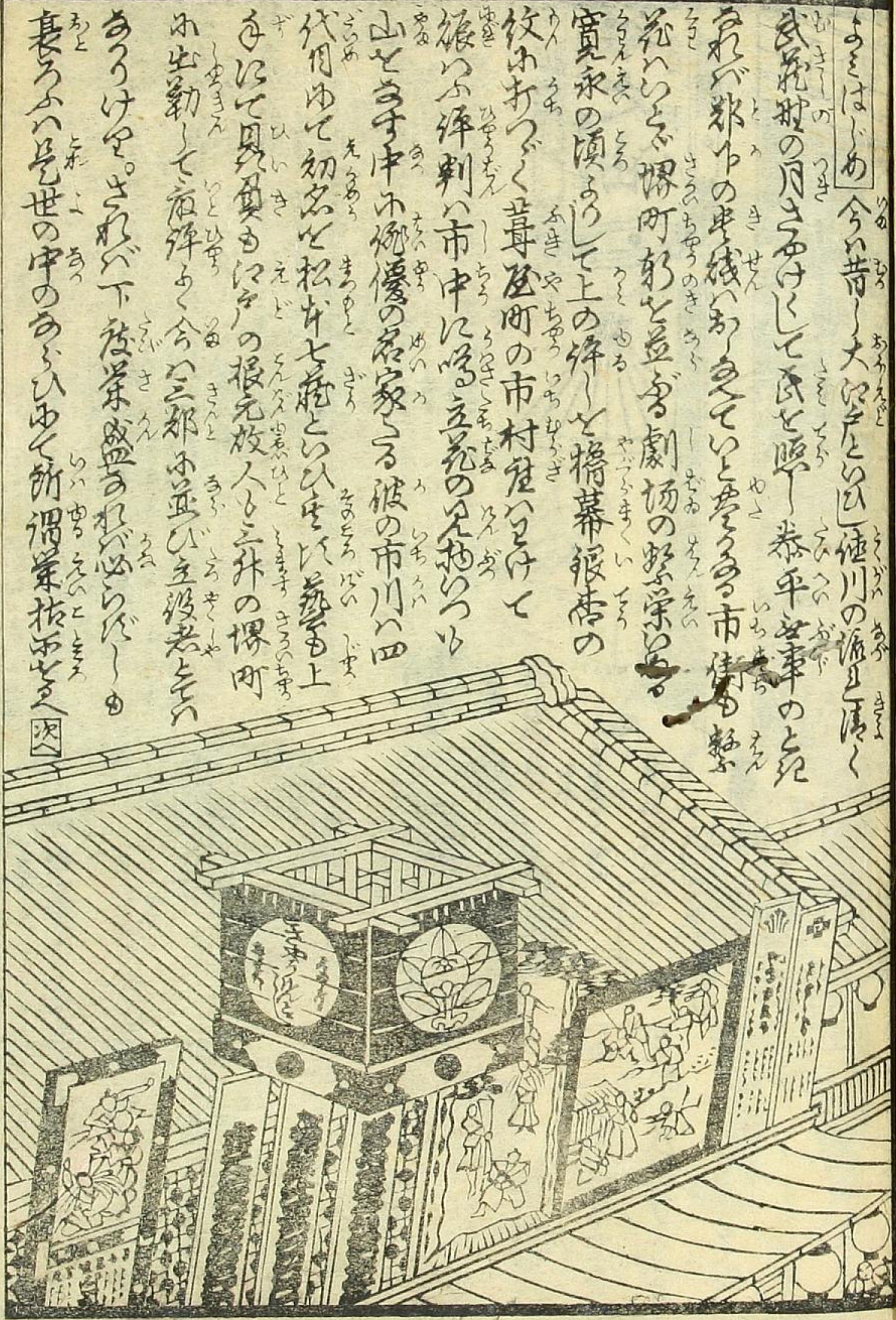
と初め

外部賣

虎登るあまのし出胎

此時の名額

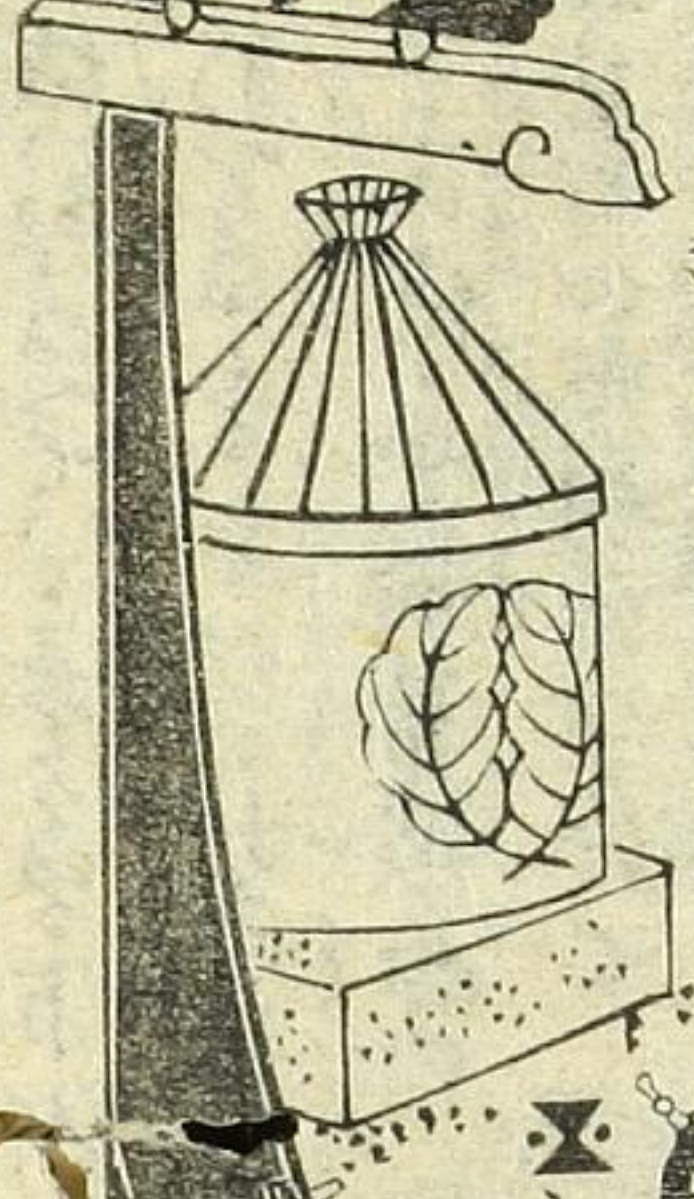
梅屋町曾我



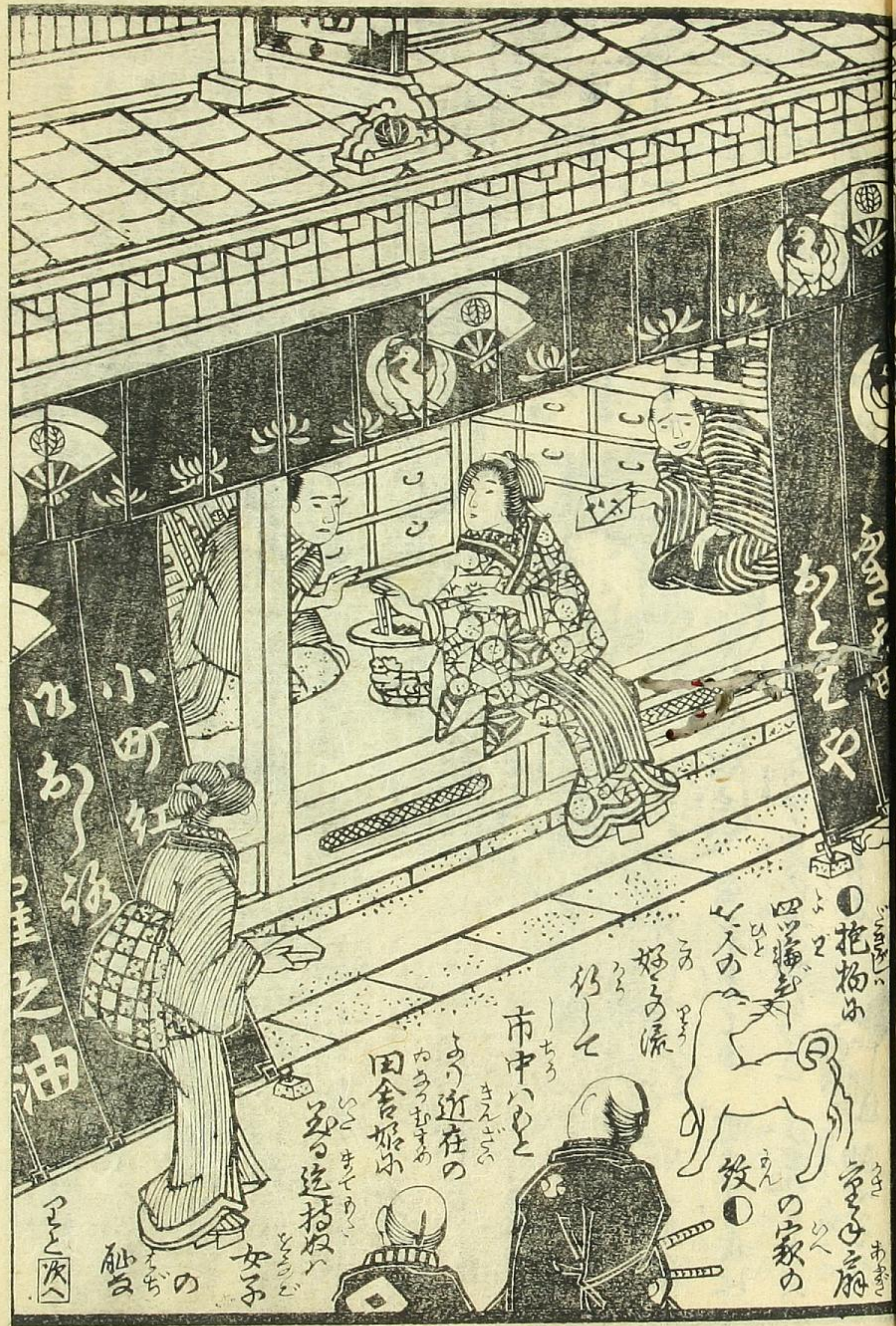
武花町の月さあけしてはと鳴り 恭平を奉ると死
花は那中の串練あきていとをるる市情も整
花はいと標所和と並ぶ劇場の繁栄
寛永の頃よりして上の坪と橋幕帳巻の
紋小打つく毒屋町の市村屋は行て
旅の舟判の市中に鳴る主花のえおつら
山とさす中洲の徳家の名家なる彼の市川の四
代月ゆて初名を松舟七船といはるは毒屋上
舟にて見舞も江戸の板元故人も之林の標所
舟出勤して船評ゆく今に三都小並ひ主役者とい
あつりけり。されば下流茶盛るね必らばしゆ
裏ろふは是世の中にあつひやく所謂茶坊をてん

つぎ 湯屋と云ふ屋敷ありて後に高村市村社出勅あり
 初代尾上菊五郎の墓ありて保三奉の初舞臺とのいと
 伴とく物名尾上左門といひ若女形ありて宝曆
 二年先振して主役とあり容貌も人小遊これ入
 乳よく同和元奉より彼伴お記ゆり上と云ふ
 後何日定まる身の出世元来江戸のまじりて
 二流小大坂の屋とも云ふ忽ち市中に

蘇屋町
 維之油
 音羽屋

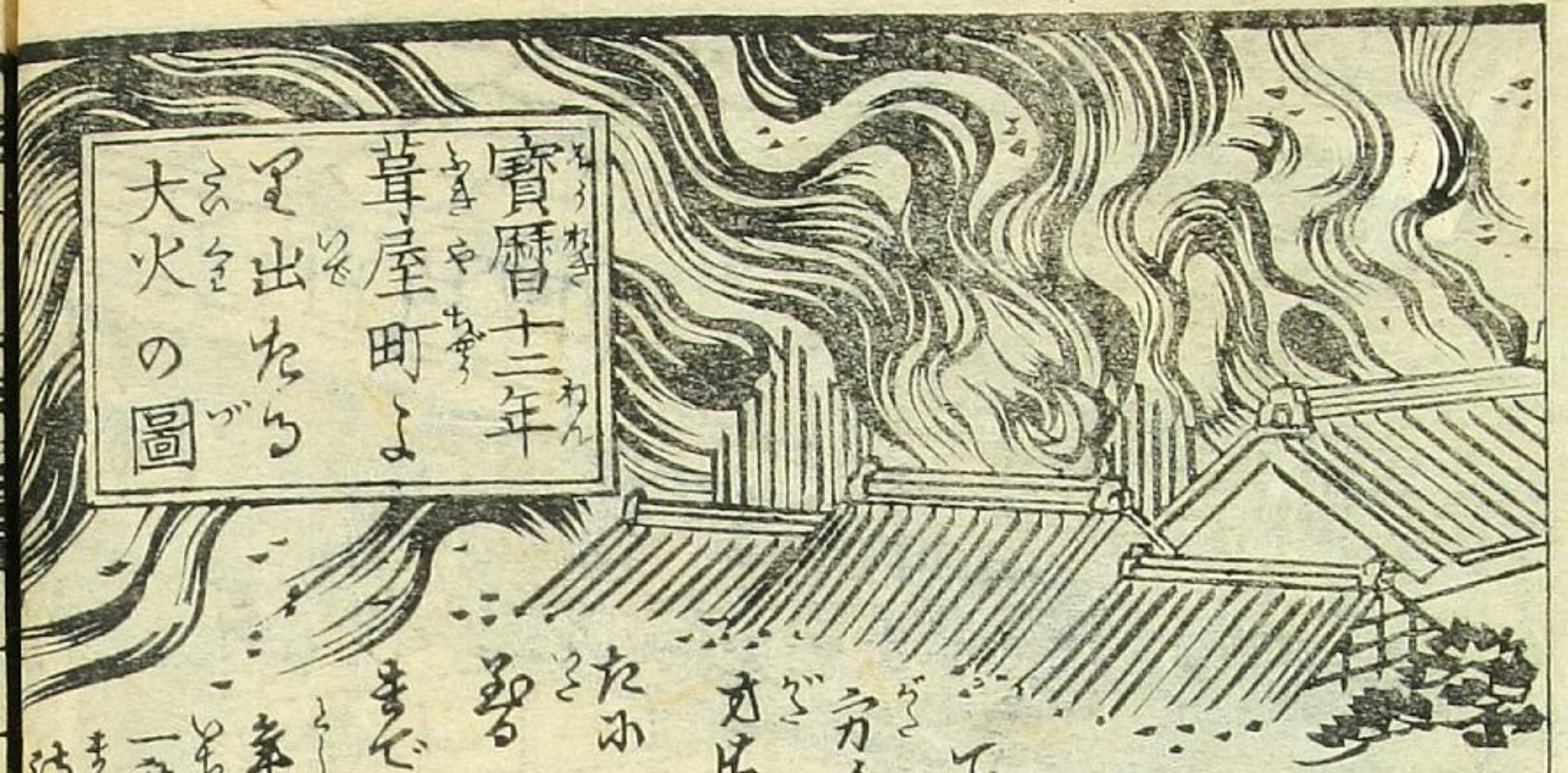


御加羅油
 女の子の巻油也
 後より一燈のたき子の巻油也
 縁後を巻程云
 のは然る毎の出極
 小女いひきの
 侍兼てき
 そいで求
 せられ
 好
 甘好
 木竹
 の



おとせ
 抱抱ふ
 四つ脚の
 人の
 好みの派
 仍そ
 市中ハハ
 よの近在の
 田舎娘ハ
 なる迄抱ぬ
 女
 触
 油

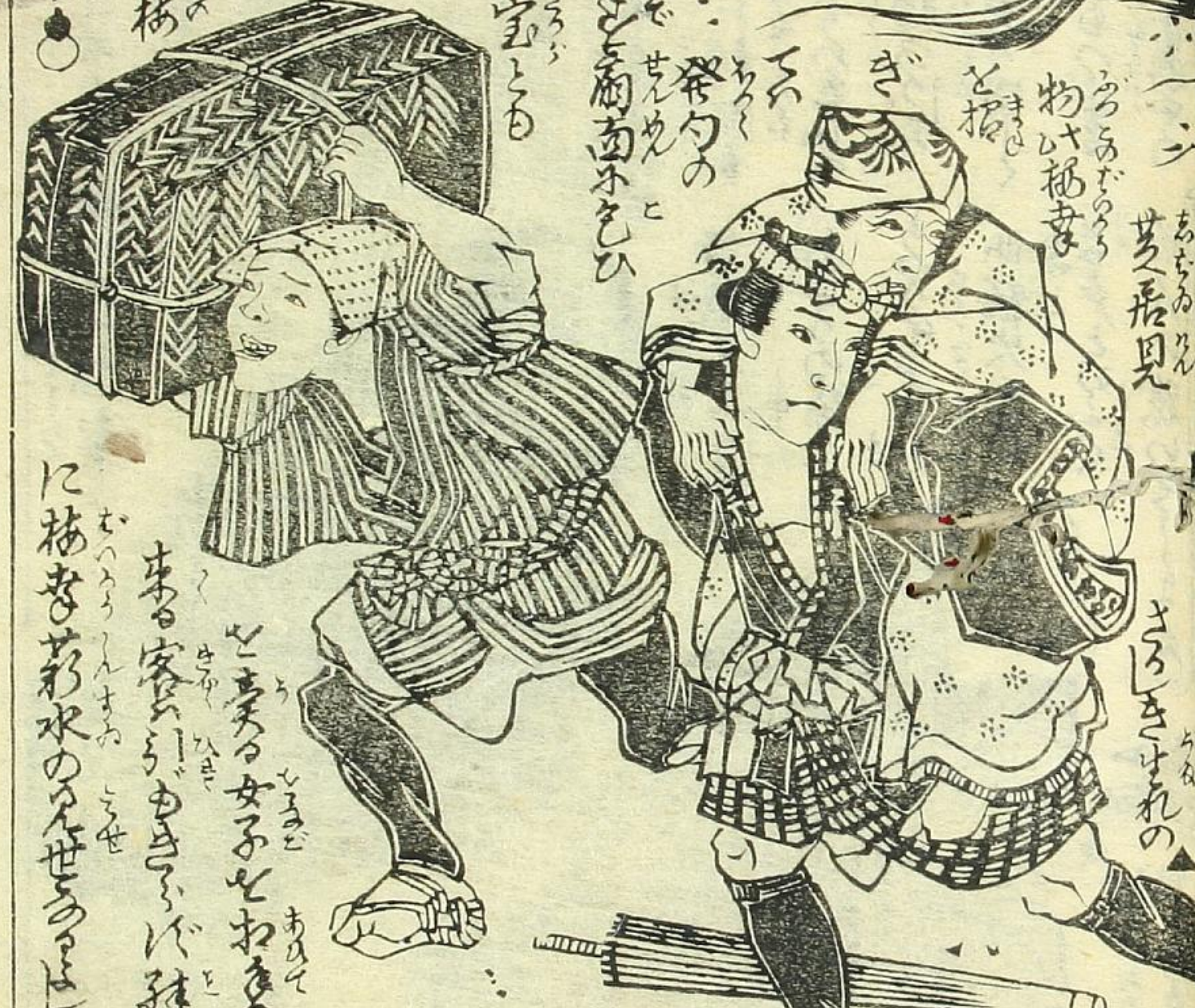
寶曆十二年
草屋町よ
里出たり
大火の圖



圖の左の女は梅屋の御前
三代目新水と並び無
おのれをせむは後
のちを渡りておのれ
て好むはおのれ
方かおのれ
幸に
一度の救入と
結ぶる

梅屋の御前
ハルオ見
分の岡
と後
新水
油小るお

又おのれとも
又おのれとも
又おのれとも
又おのれとも



類の元世と聞
大造りの
五間口の緋
深出た音
羽衣の家
名も枕優
の愛故小光
早知やく
元世附い
ねと知世華英

弘明の客市に「波を六味」
 余暇さゆもあはれとゆくのく「舞田」
 たりる相音羽の波を垂いとと
 なる望はしては公人も男女中
 七七八八の多きふのり店の
 系緯の表分もと事別なる
 仁会米といふ老練の若手作せ
 名茶入とも相じり利便も
 老より益とて今も三流の
 商店と人も羨む程ありが
 隆々河いなる海さう因づく
 十二年の十二月にまゆつる
 大海田小をきけは音羽の

燃え上り終ゆ
 ありの隣り
 小猛火天井
 火戸といふ
 燻ん小燃い

つむぐ火の子と
 巻あげて忽ち四方
 小焼候から燦所
 草花町平
 小及び
 花町
 人形町
 和泉町
 後花園と
 十四五何の
 家並ハ

燃え上り終ゆ
 ありの隣り
 小猛火天井
 火戸といふ
 燻ん小燃い

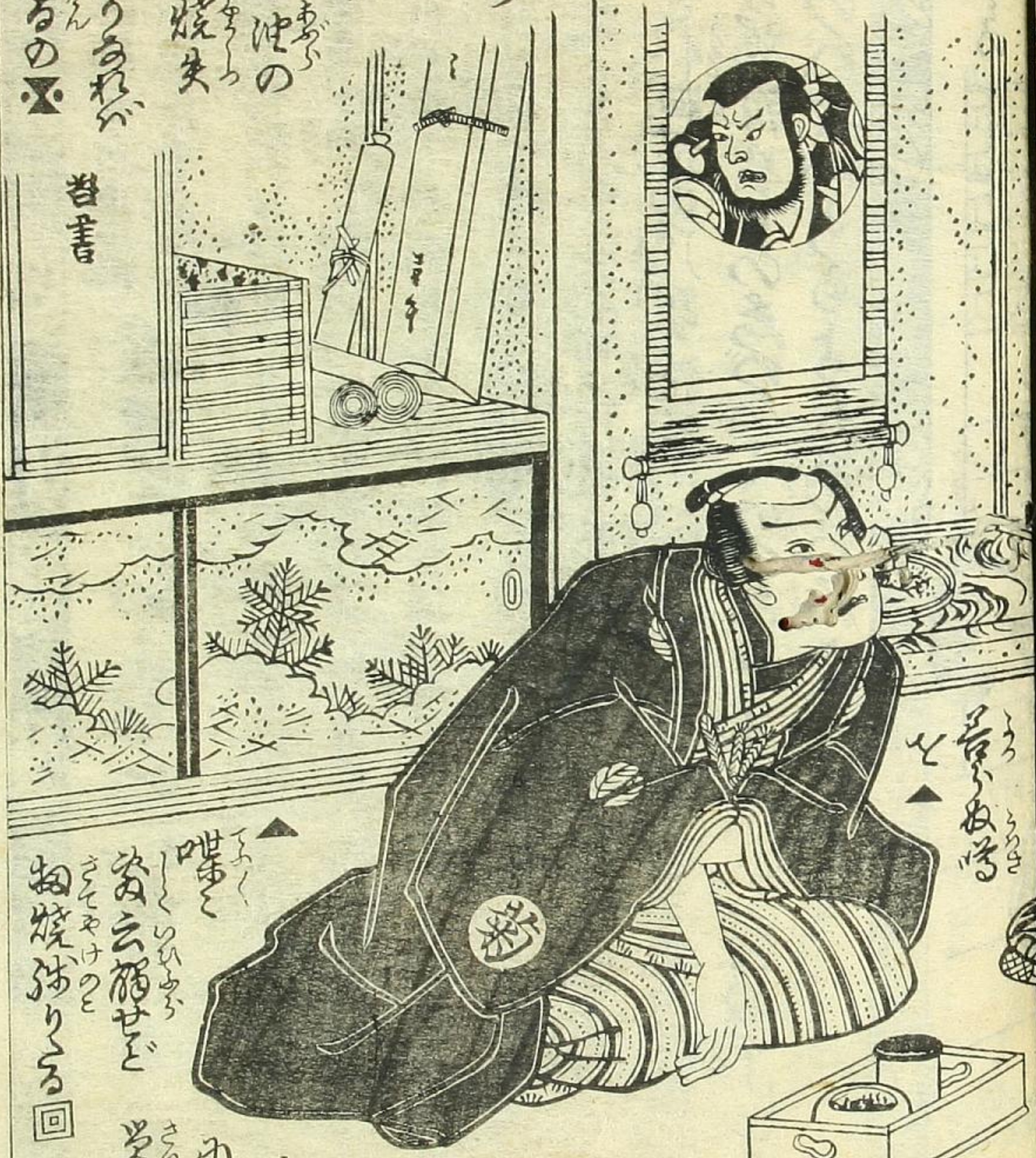


燻ん小燃い
 火戸といふ
 小猛火天井
 ありの隣り
 燃え上り終ゆ

南無

歸途

別れしき
 ぬえろ火え
 ある家花の
 却て風お
 吹とく
 兄世花の
 麻糸とあ
 ねど妻の
 後りそわ
 煉場のと
 しかるけり
 しくせるの



物焼ゆりる回
 成日梅
 仁玄
 十
 数
 十
 十

水の風
 さも面月
 ちれ小機
 矢のほ
 ちの愛く
 ちひてせるの
 人可殺向
 ちの梅香
 ちのほそえ
 ちのほそえ
 ちのほそえ



ちのほそえ
 ちのほそえ
 ちのほそえ
 ちのほそえ
 ちのほそえ
 ちのほそえ
 ちのほそえ



つぎ十日とせが
僅帳の園も麻ざび
支は今宵へん世の
力のわわしけりの
襦袢ととせせ
働は功と術共
けう人の為なる
とと夜老
實の仁と流
進め小梅香も孫と
おて我もととと
づけ里柳りまらうの

必らば法
とせ世の
字えと悟る
生辺入老梅香
お前(れ)おこは後
小後の瓶儀と
戒められ
ハ仁と流
ハ合と
文納め
芳めら色とへ店
と支此する我孫
白紙の色ととと一
茶と世のめととと
と支此する我孫

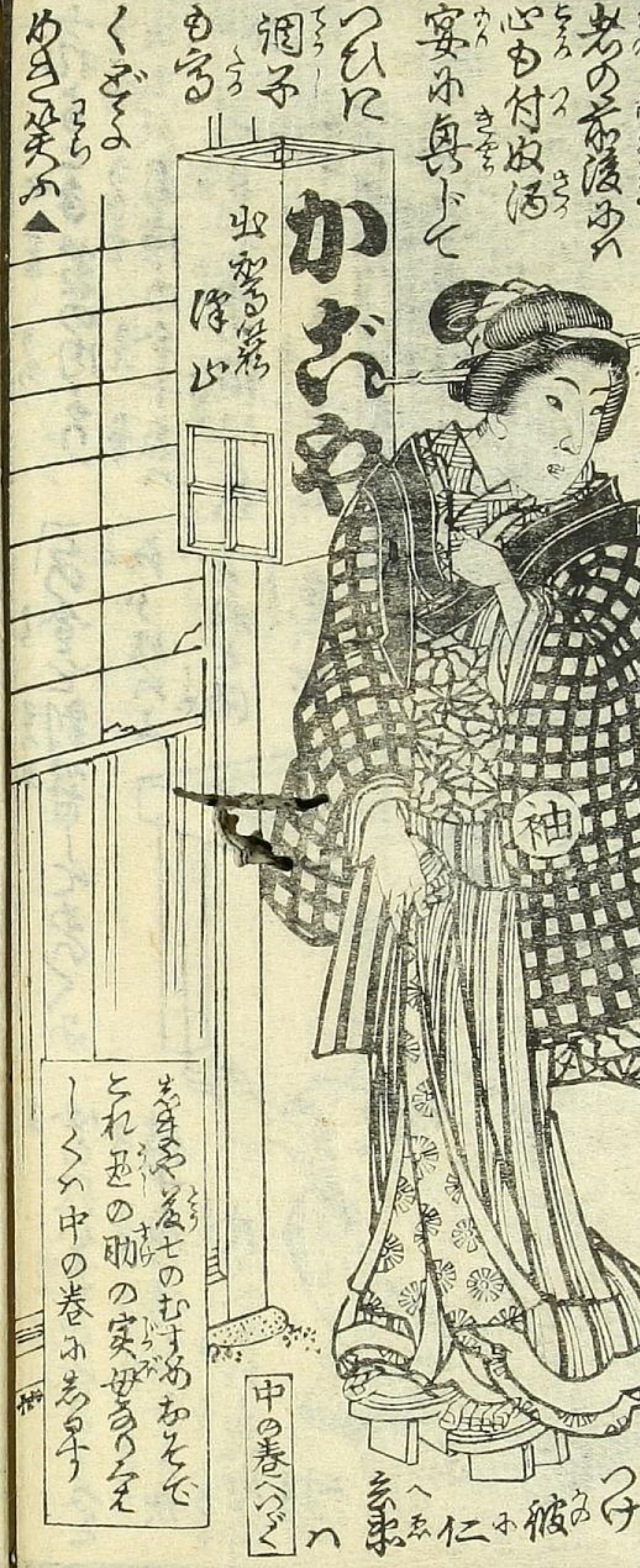


くれよととと葉の内より
丸出は菊の金十あり
是ぞ後の徳ひと
色ハ

必らば法
とせ世の
字えと悟る
生辺入老梅香
お前(れ)おこは後
小後の瓶儀と
戒められ
ハ仁と流
ハ合と
文納め
芳めら色とへ店
と支此する我孫
白紙の色ととと一
茶と世のめととと
と支此する我孫

久保田彦作編 梅堂國政畫

黄令与之出火の勢を激し
 ひりて、つらき事と云ふ
 由火元我店敷十日余の膳
 字のつきたる時、せうるれがき
 老の前後めい
 心も付ぬ酒
 宴小舟とて
 ついに
 酒子
 由字
 くさき
 めき笑ふ



鳥追阿松海上新話
三編九冊よき切

魔島一夕話 二冊よき切

折本 大日本物産圖會五帖

奴六の志れく

折本 田舎源氏五十四帖或帖

團扇 文之重 水鏡文 山水画 由好乃牙

折本 東京三十六景一帖

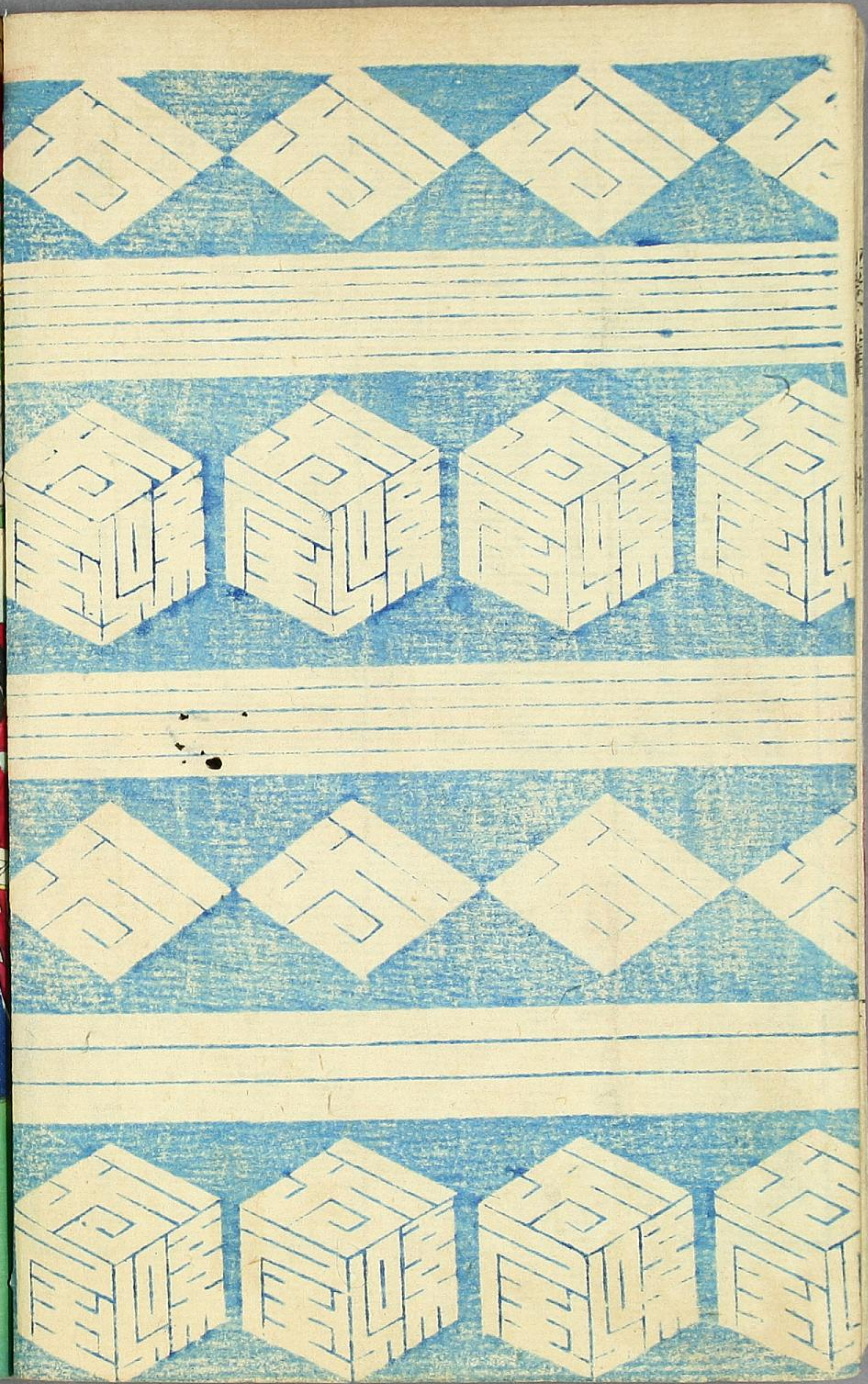
大黒種志修々

分

味漢洋書籍 東錦繪地本

問屋

出版御届明治十年十二月十九日
 第天 廿之區 糺 宿 下四丁目 二番地
 編輯人 久保田彦作
 東京第天區 本町日本橋通 二丁目十九番地
 出版人 大倉孫兵衛





上のまじり
 あつて
 証あつて
 飲りつる薬碗
 とおあげのちと
 静めても一人お
 あらぬ廿五人の
 時々若死血氣
 由糸刺し兼つて夜更お
 るねげれも辺りへちりうぬ美
 ひも果の怒ささこの露さか
 空つけ隣町にて脱決しる者
 ハシラもふはらうとけ災害小

加らじのころ家花遠由失あは
 火難と適まて居あつて今宵の酒を飲あつ
 言あはれを序後の人の歌
 きとよそふる音相おのれ世
 の奴系はく今小おひかせん
 と時ほと云
 いとせ隣
 町のちちを
 遠い云合
 さねと後
 小住あ
 甘め

て
 小住
 甘め

上野
 小住



鳥糸程
 延年喜

鳥糸程

錦葉堂

錦葉堂

おぼろし
家花と
打毀して
後どのんと
各ごまか
細飛まか
かひらき
女子ハ
笠甲ごころ
さへんる
写小解る
数百人夜
妨れて



焼失くると三社の芝居
その外
茶屋
もそ
幸の
外月の
ひらひ音
徳も出来
退家辰も
五掛ひえの祭
葎の地とあれはきき
辰も具行せんよき仕
波らうとこれごころに

音羽屋の家の早りに
よろころう 鹿母家の
嫌ひ多くエイク怒
あておこらせが
さすく小多
勢ハ割一難
く曉を死
返小粉とん
中を走らうらと
然れど元より火
をぬく公海
波の花あれが
是とぞ



具負も多し
菊五弁ハ出火
のりか
市中
人
も中
てそ
新者
の者
坊つ
て悪
次

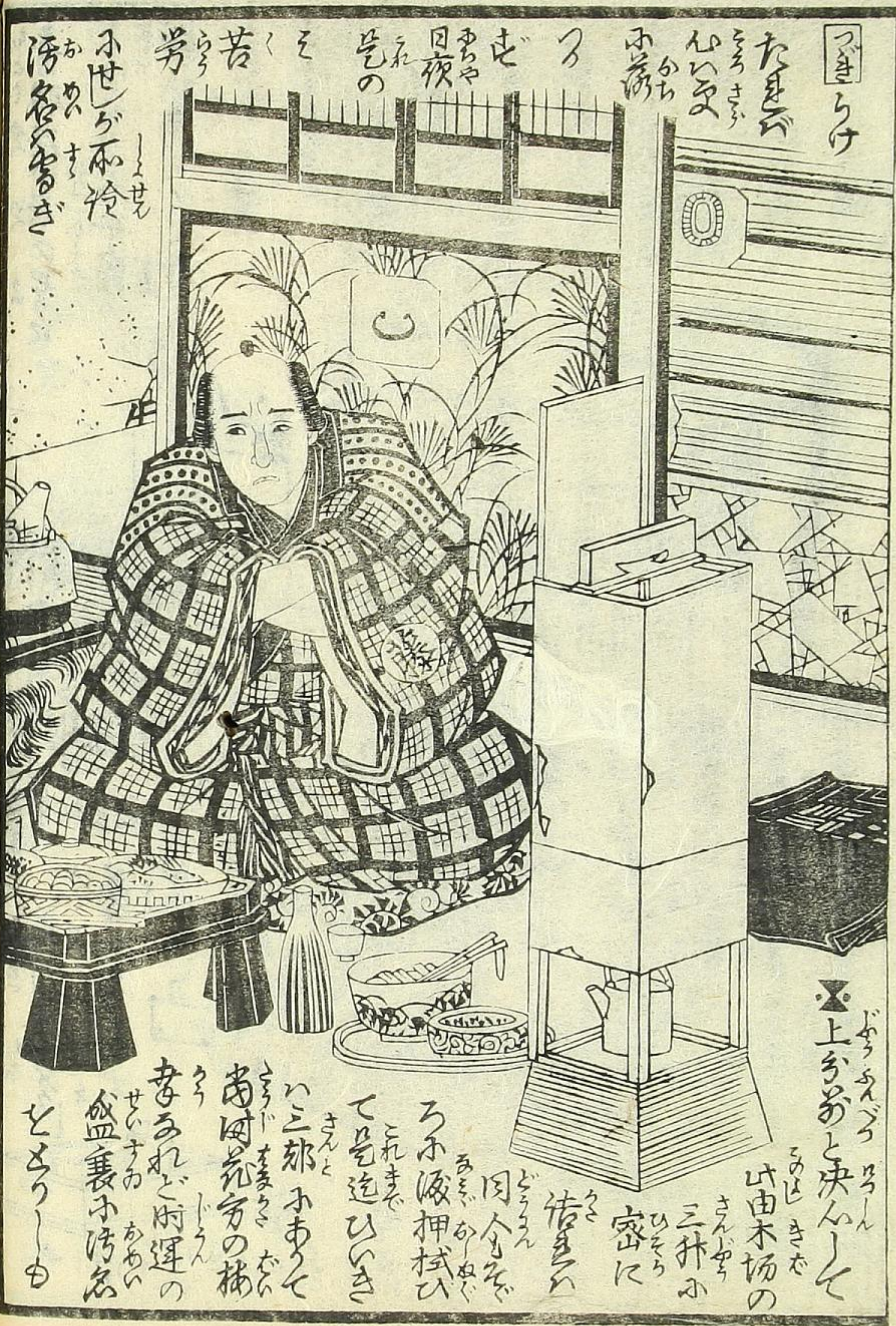


かじ
ひと先
涙花
二三年
修め
て再ひ
花と
か
きり
今の船
長守と

こそ
きく

母
◆廿あて先程の
初孫産めで此處地の
お名残程をとお勤め何人気が
と流石の江戸の大達者流き流
れの市川と榎本の梅の芽はさ次

時
花
花



つぎ
たまた
心交
小落
る
む
目夜
是の
若
小世が不冷
汚名なき

母
上りあつと決りして
由木場の
三井小
密に
信
同
ろ小派押拭ひ
て是迄ひいさ
い三郎小あつて
南田花方の梅
孝あれど附運の
盛衰小汚名
ととりし由

つぎ花も実もある
三升か河小狩由
眠らるるを
ゆめあげた
涙小れ
初あふまに
さればは身
初具は
菊五節
園十節の
引立て
妻紅



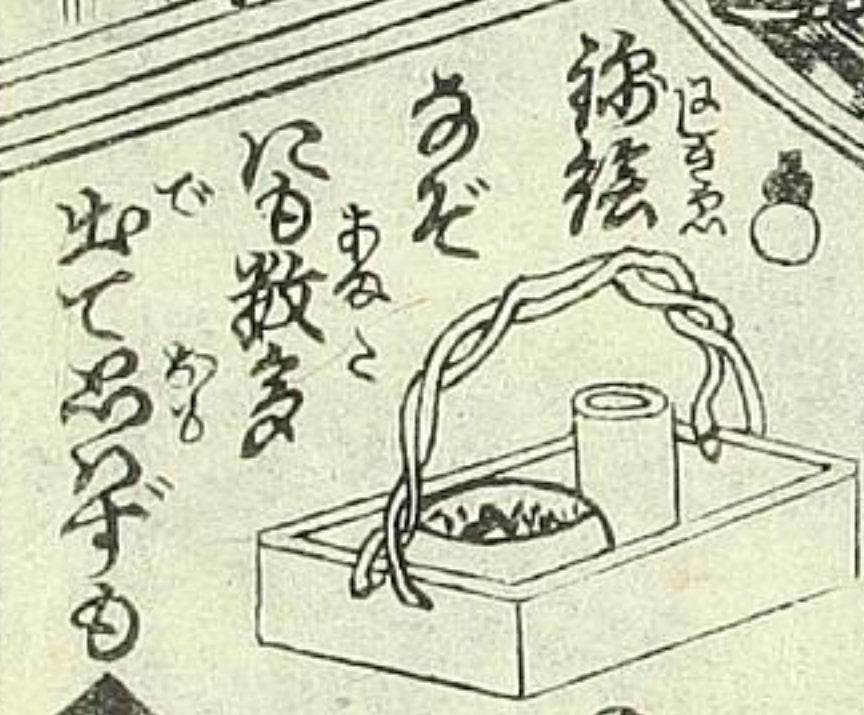
あまのれ帯の
八百八町一丁の
二才のきよ子も
男い

あまのれ帯の
八百八町一丁の
二才のきよ子も
男い

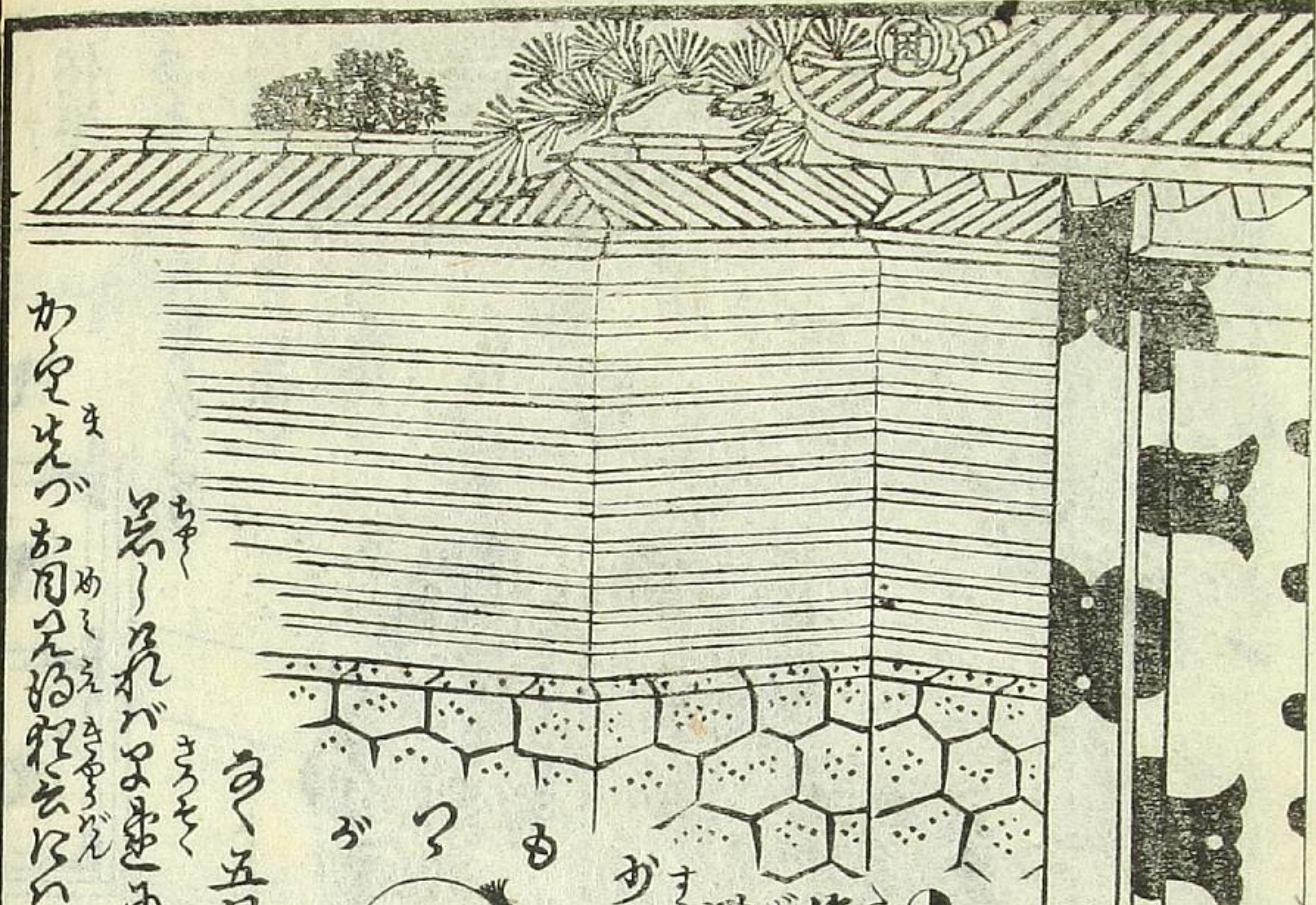
か名残小花
菊五節ハ
三升
初あふまに
さればは身
初具は
菊五節
園十節の
引立て
妻紅

あまのれ帯の
八百八町一丁の
二才のきよ子も
男い

仕組
あまのれ帯の
八百八町一丁の
二才のきよ子も
男い



あまのれ帯の
八百八町一丁の
二才のきよ子も
男い



勤めたる好比きとて世にええり
花の末熟あはれ容貌も
人ふたづれとて彼地の受も
玉ての糸のあゆも
深安き籠の
菊のいと盛
里を羽の
跡のゆるふれが
芝居の思も状旁と
云籠へ回して條も
町小番宅を據へ今
昔にあり笑まおとせ
の妻とてめ和え奉の

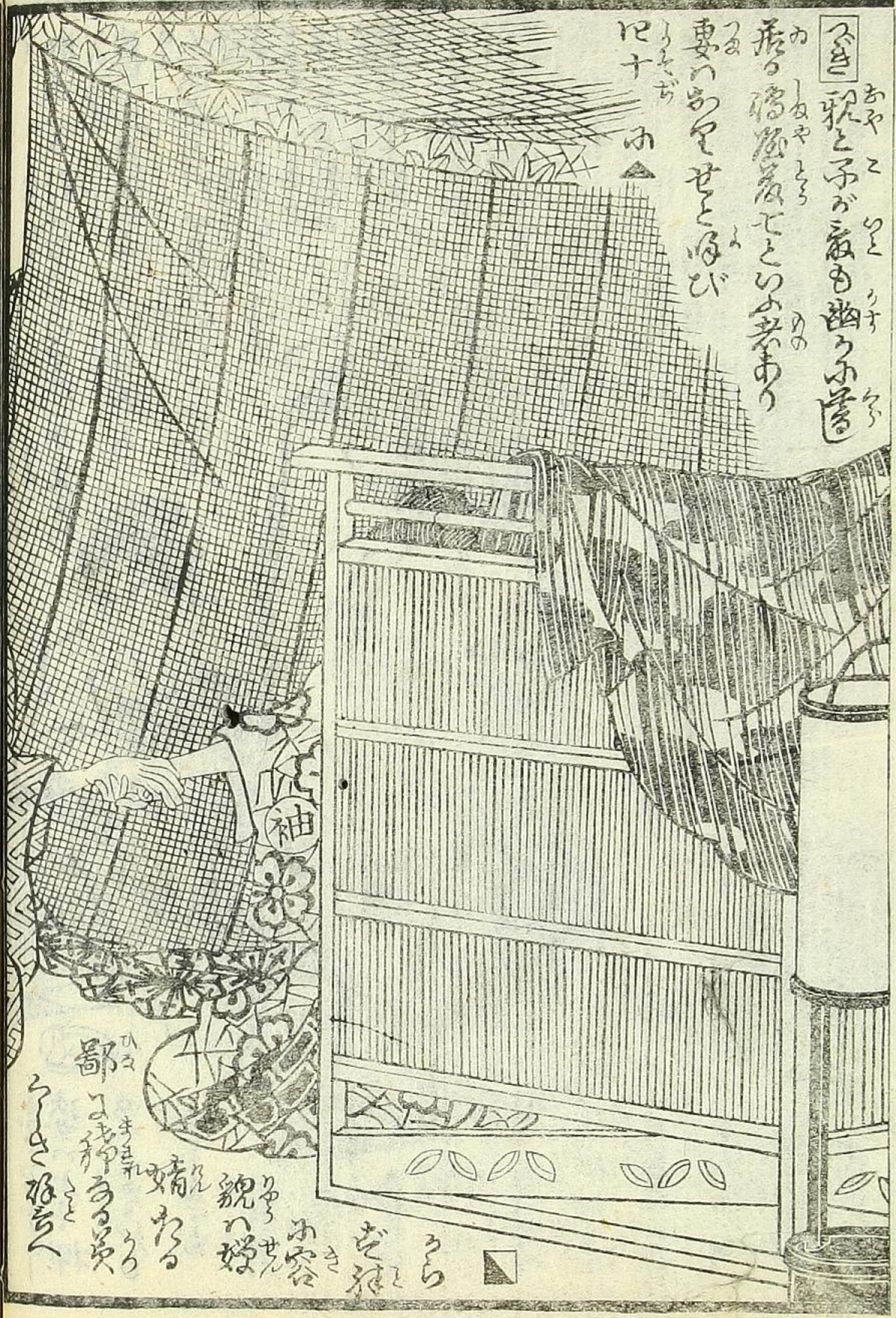
五月の末
あはれはばよき
か空先づお月をぬれ
か空先づお月をぬれ
か空先づお月をぬれ
か空先づお月をぬれ



勤めたる好比きとて世にええり
花の末熟あはれ容貌も
人ふたづれとて彼地の受も
玉ての糸のあゆも
深安き籠の
菊のいと盛
里を羽の
跡のゆるふれが
芝居の思も状旁と
云籠へ回して條も
町小番宅を據へ今
昔にあり笑まおとせ
の妻とてめ和え奉の

五月の末
あはれはばよき
か空先づお月をぬれ
か空先づお月をぬれ
か空先づお月をぬれ
か空先づお月をぬれ

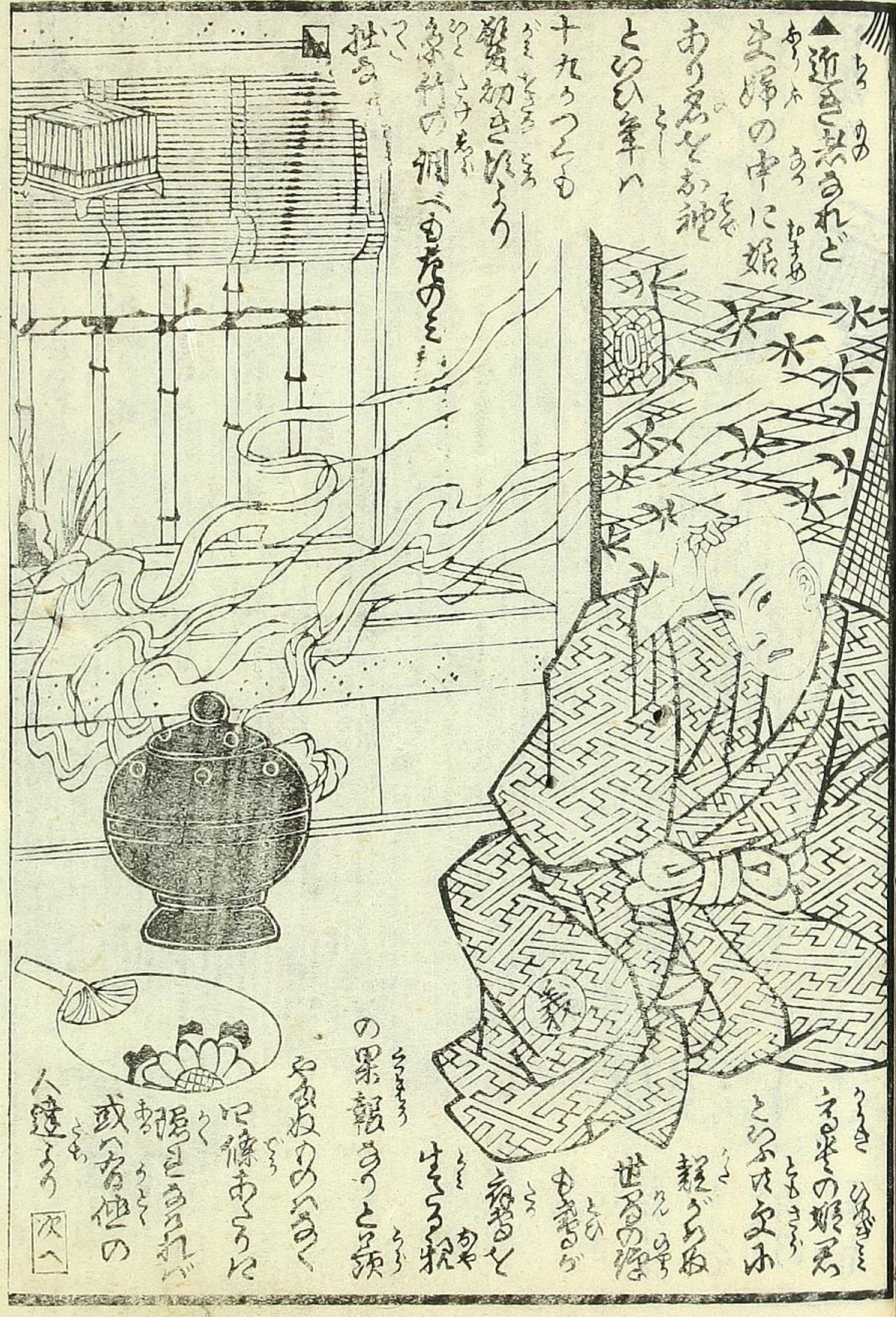
あやこ ひとと子かぬも幽う小言
かぬやと
飛る鶴もあつとこのあつあり
妻のあやせとあひ
に十 ぬ



お容
親の娘
婿たる
鄙く種ある
うさね

▲近き其れど
あつあつ
主婦の中に始
ありあつお神
といひ筆ハ

十九うつもの
髪初きけり
あつあつの洞もたの



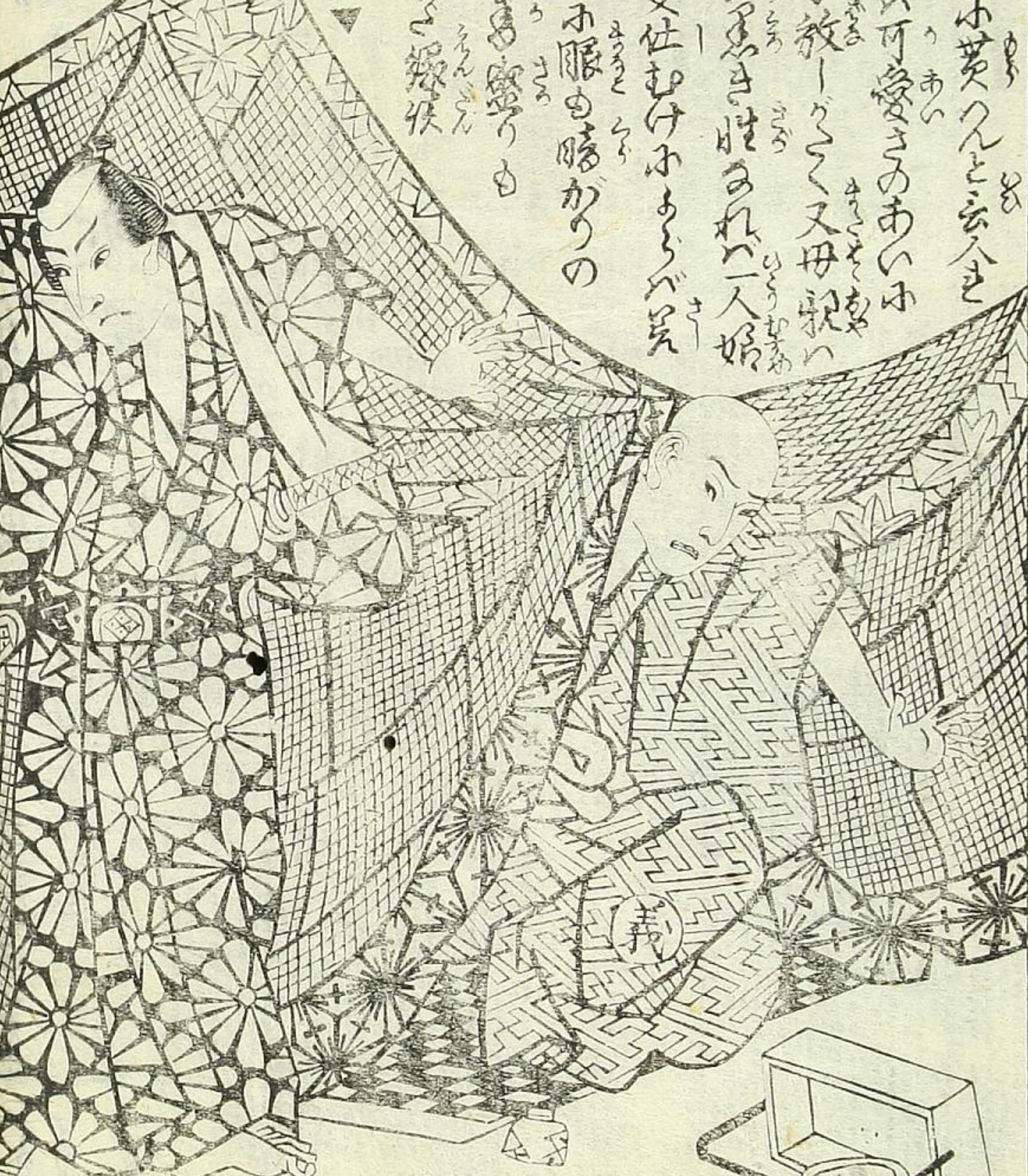
の果報ありと頭
あつあつの
に徳ありに
あつあつ
或は皆他の
人達より

つぎ 妻小英久と云入さ

てもな七い可愛さのあいな
病をそま教しごとく又母親い
中へ小娘思き性るれ一人始
の合の夢仕むけ小あらば見
上んと致小眼も勝かりの
園の梅うまも盛るも

あはく
西ちやけ
日夜化

あはく
西ちやけ
日夜化



中ま
まはれ
供のの
あま付て
加る籠小
やんと勝
屋の門はる
強て面うこ
一挺信まこれ
といの毎初
芝居の通ふ
江戸の徳儀の
梅草あね

あはく
西ちやけ
日夜化



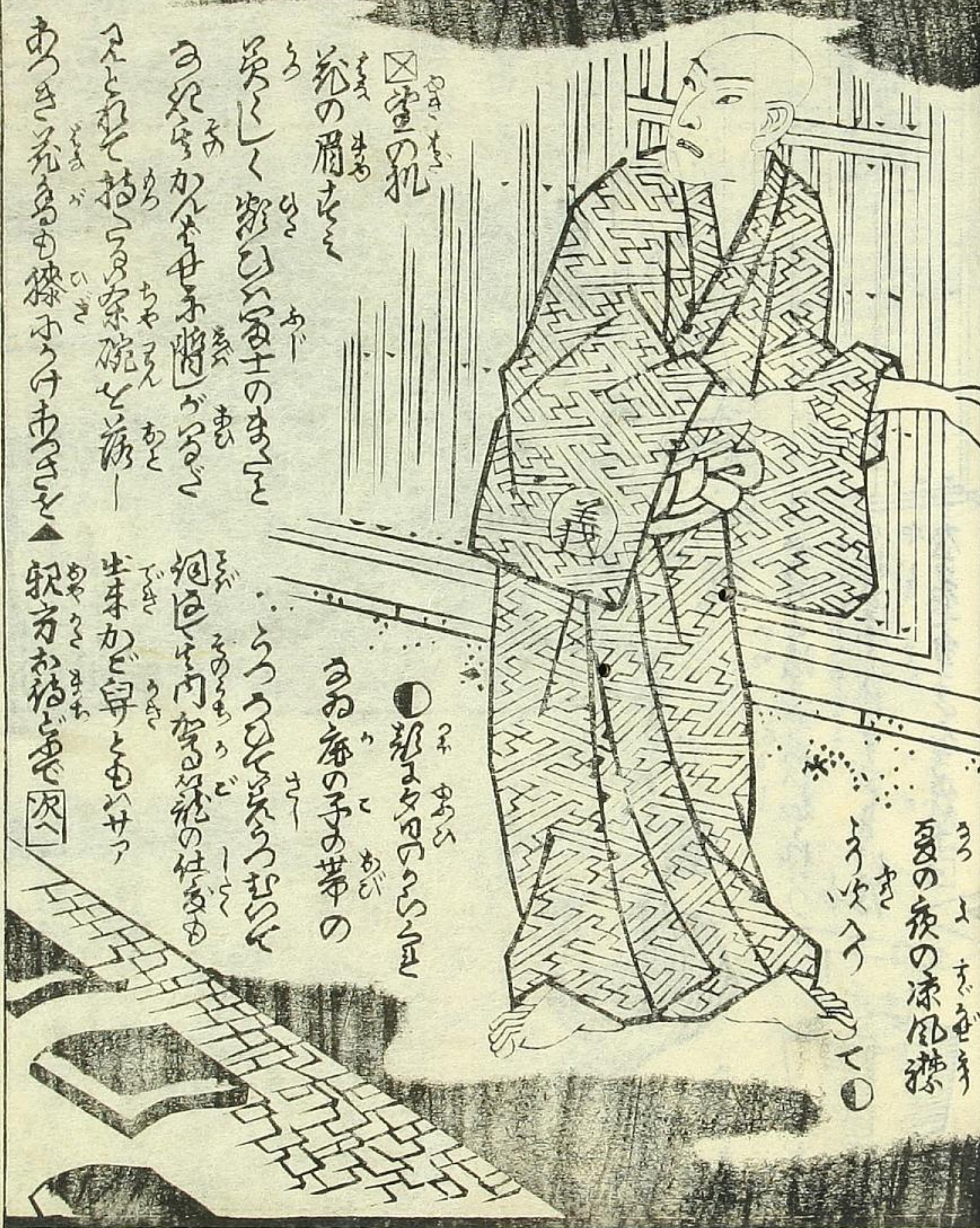
あはく
西ちやけ
日夜化

ついで 夢舟の入り
 りの 寝姿もほ
 酒まもるふら
 り さらりんと
 風七の ちか
 小雲 付着
 花の 刺衣
 と 仕立て
 始ちを
 柳青の 雲
 初と せん
 夢舟の
 出花を



「忘るて 枕つら
 りの 寝姿もほ
 酒まもるふら
 り さらりんと
 風七の ちか
 小雲 付着
 花の 刺衣
 と 仕立て
 始ちを
 柳青の 雲
 初と せん
 夢舟の
 出花を

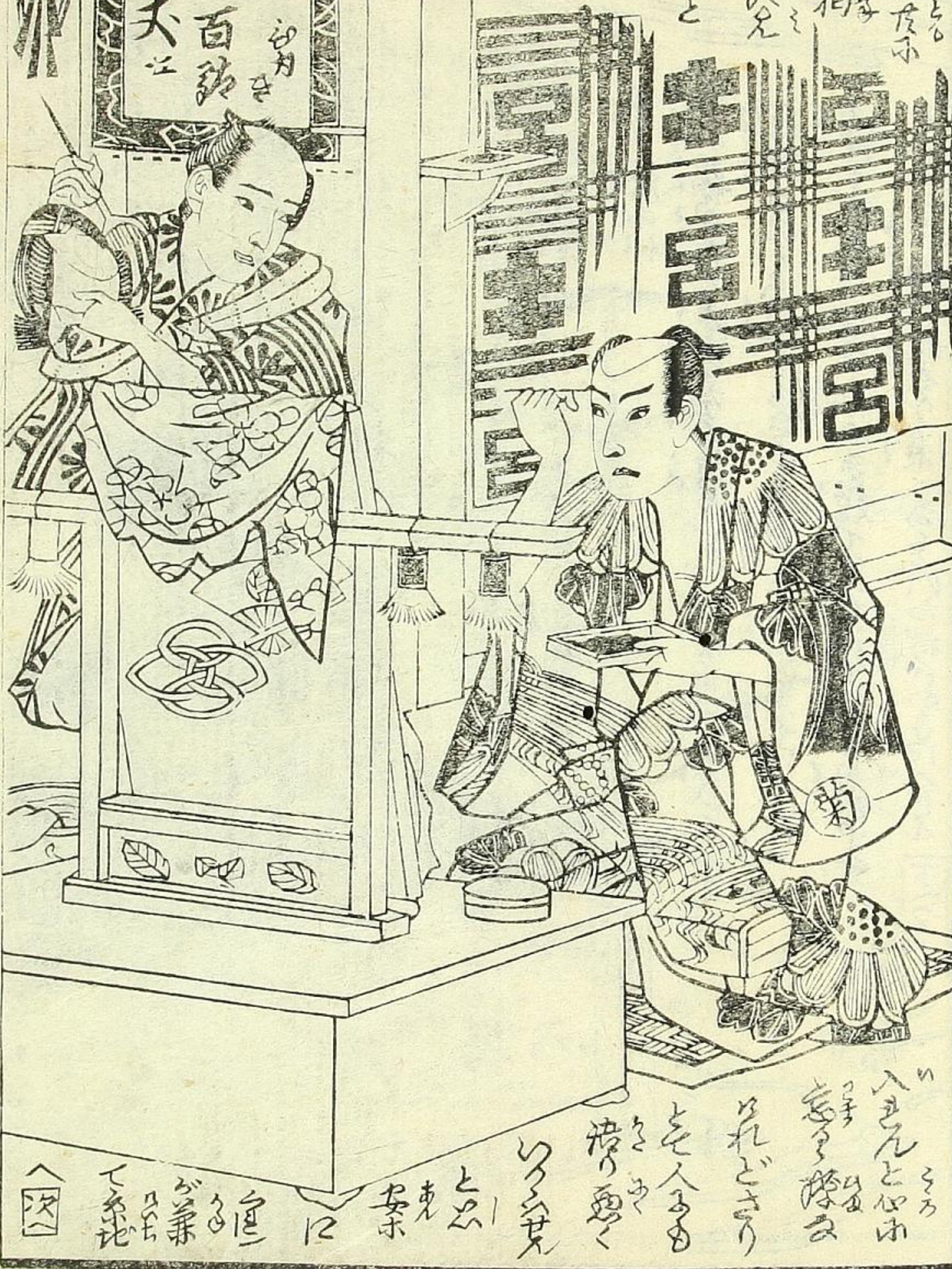
折屏を
 か茶ひ
 と茶ひ
 の 小
 出 廿六
 へ 多
 と 入
 ち 神
 つ しく
 お 疾
 育 ち
 初 ね
 初 ね
 初 ね



夏の夜の涼風
 初と せん
 夢舟の
 出花を
 の 小
 出 廿六
 へ 多
 と 入
 ち 神
 つ しく
 お 疾
 育 ち
 初 ね
 初 ね
 初 ね

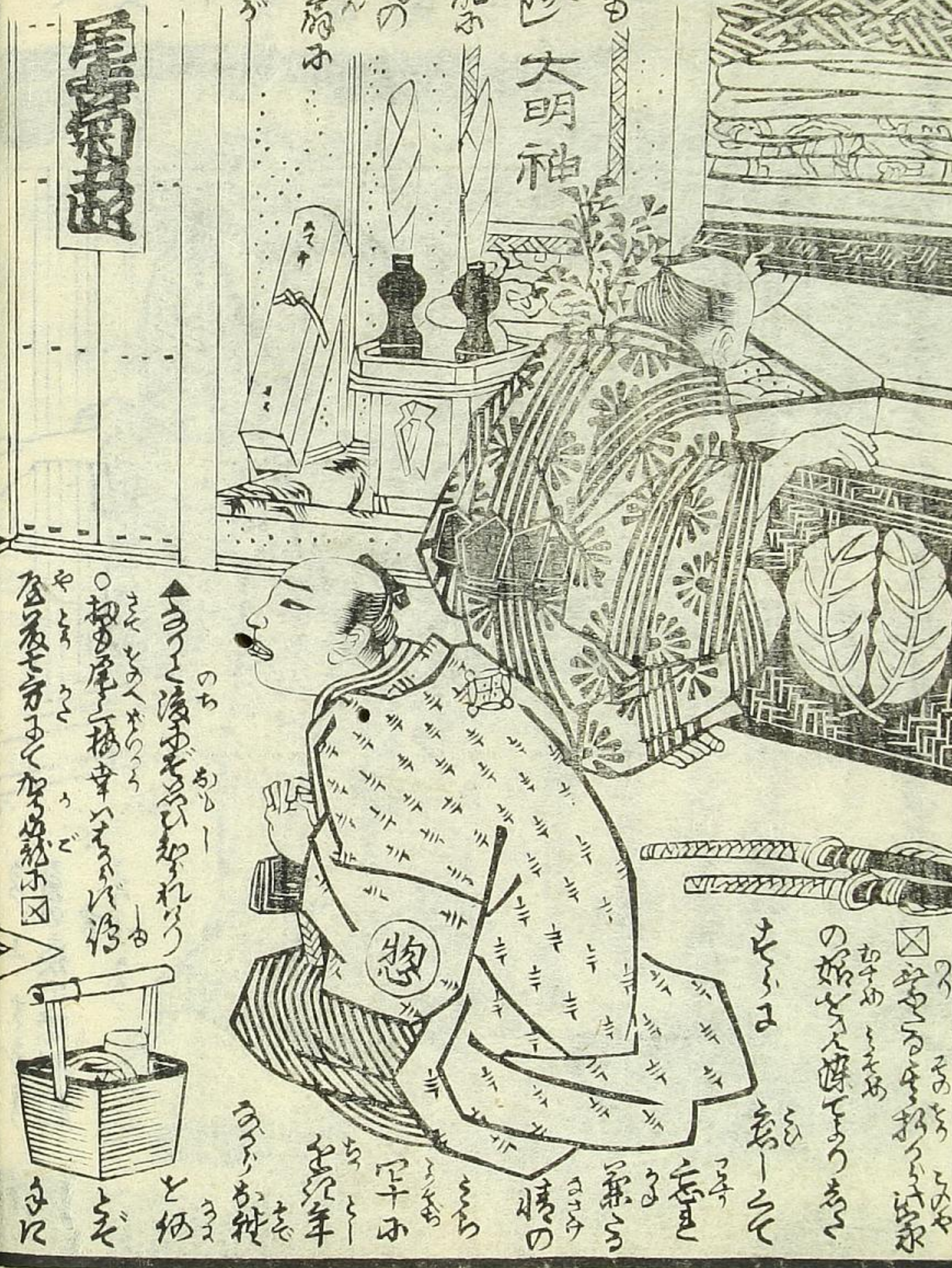
南 重 切

別は踏んで小
 赤き 狗
 の内 赤い
 多す 赤と
 如不 赤い
 小は 赤い
 打は 赤い
 是ぞ
 二人が
 悪縁と
 結成を
 める
 秀遇



八まん心
 意は
 られと
 と人
 清り
 へ
 案
 には
 兼
 日
 て地

大明神
 多心と
 上れ
 れと
 門口
 後



物
 年
 十
 年
 何
 何
 何



東京區分冊村一覽

鹿兒島英銘傳二冊

大日本府縣郡名表

諸國大合戦仇討本

年數早見年代記

同・粉色入

年數早見一校摺

昔は法し小本紙
日色入 志多く

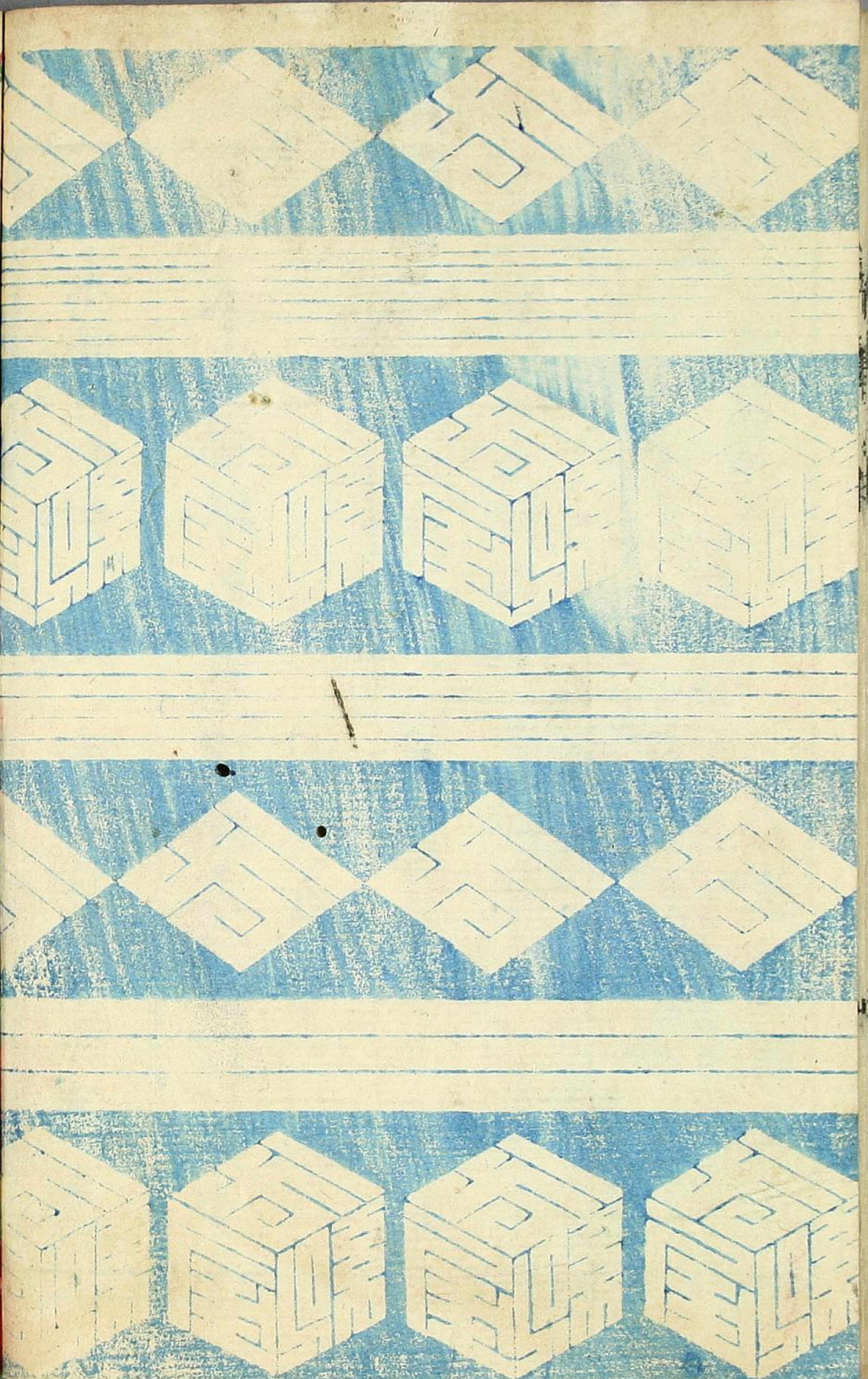
分

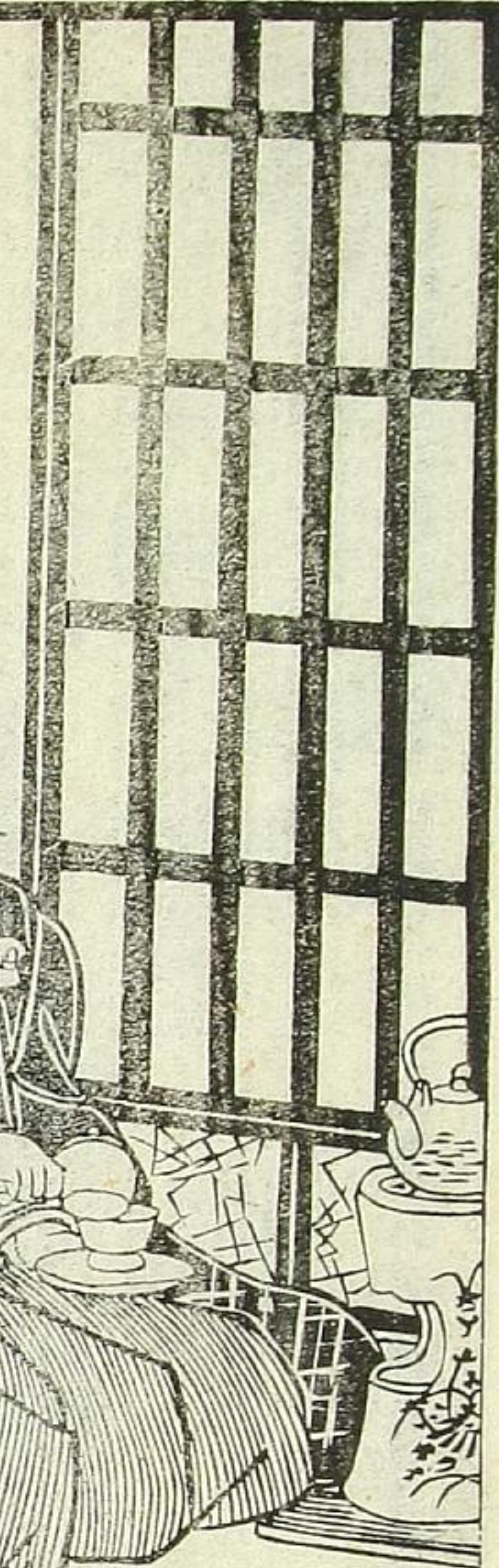
東錦繪地本

問屋

出版御届明治十年 十二月十九日
 和漢洋書籍
 第一本 芝區愛宕下四丁目二番地
 編輯人 久保田彦作
 東京東區本町日本橋通二丁目十九番地
 出版人 大倉孫兵衛

久保田彦作著
梅堂國政画
大倉孫兵衛梓

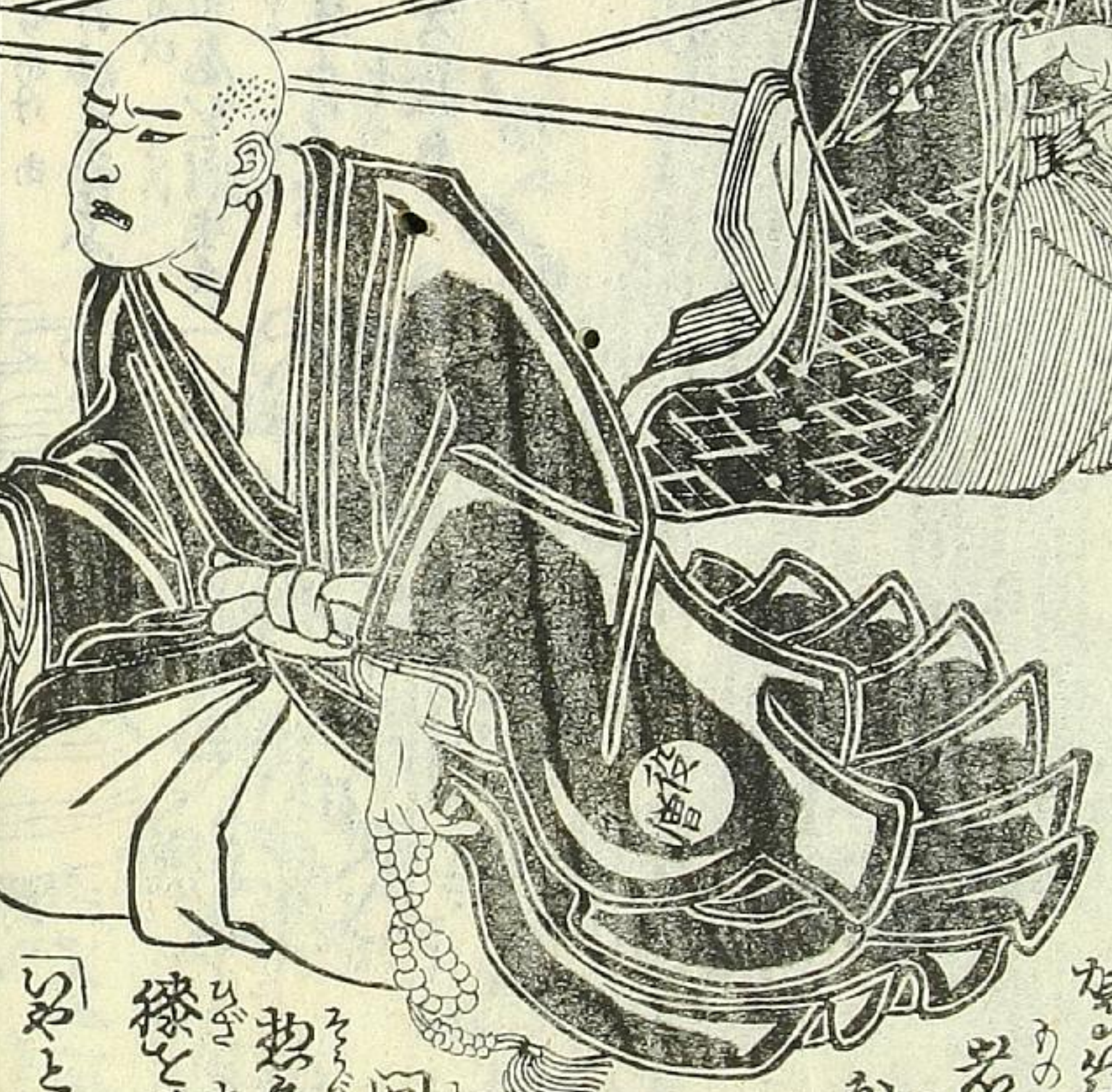




つぎ 観音さまの御劇坊
あつたお茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし

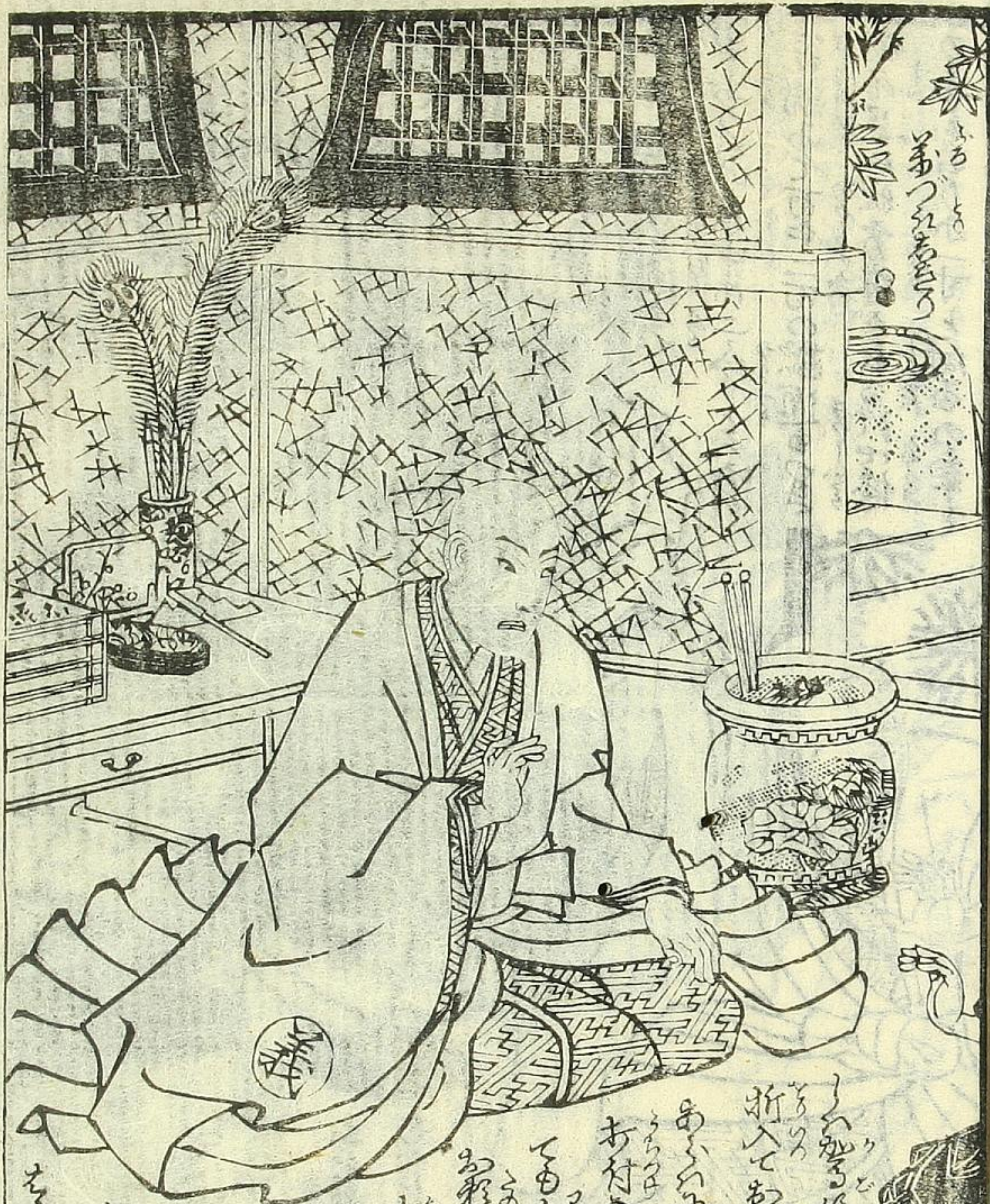
あつたお茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし

あつたお茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし



男務りの性も放煙
茶を吸付きせんとせし
お茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし

お茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし

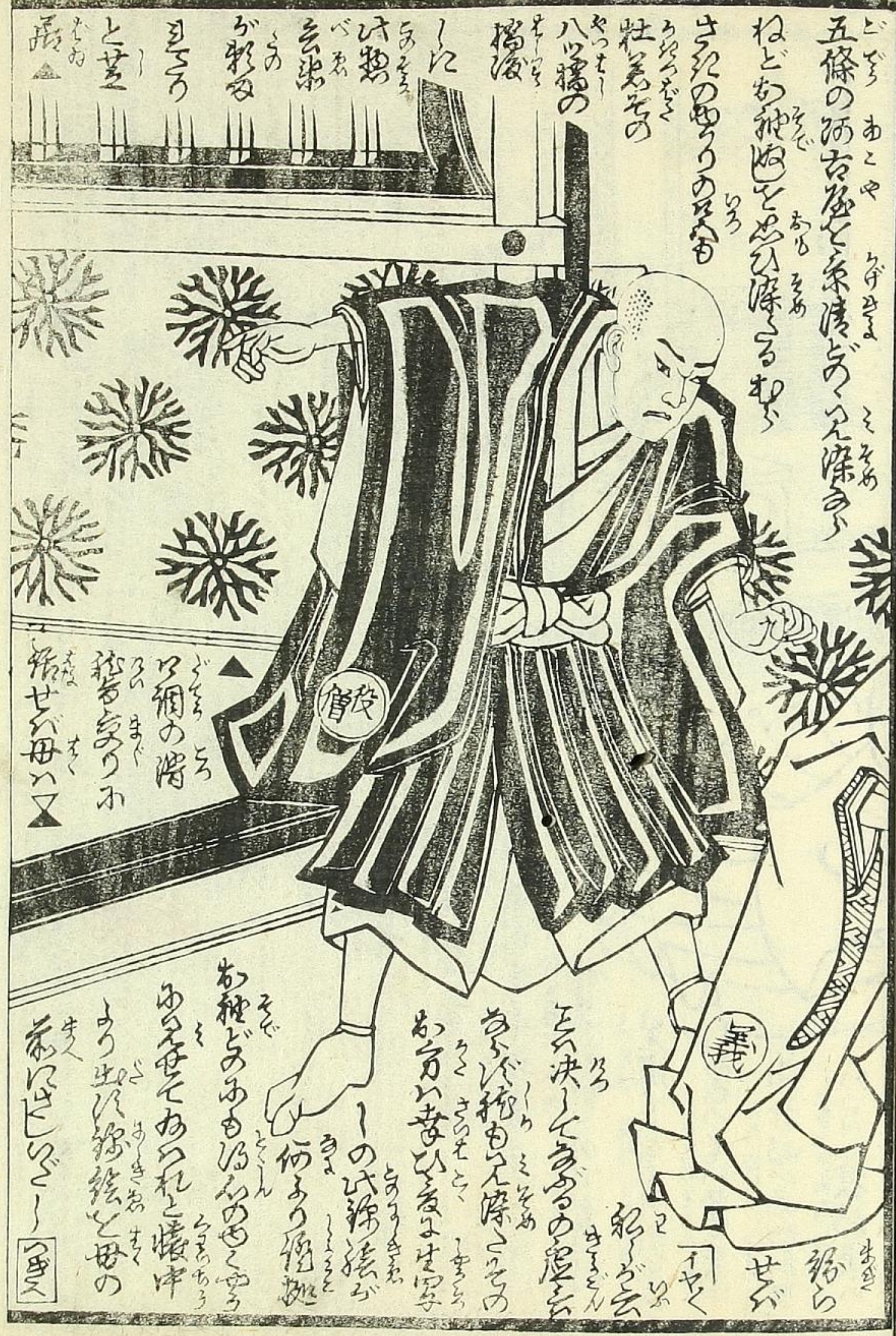


お茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし
お茶の由りえんがし



子に嫁ハ実の
神よあまの
出世はあまの
わらふまはまのも
何となく面おも
男がうけい系中ゆ二人うと
宮鏡ゆて百や二万の歌酒
何不足無狀方様か去るはは條
の源と母の一寸と何百の年と

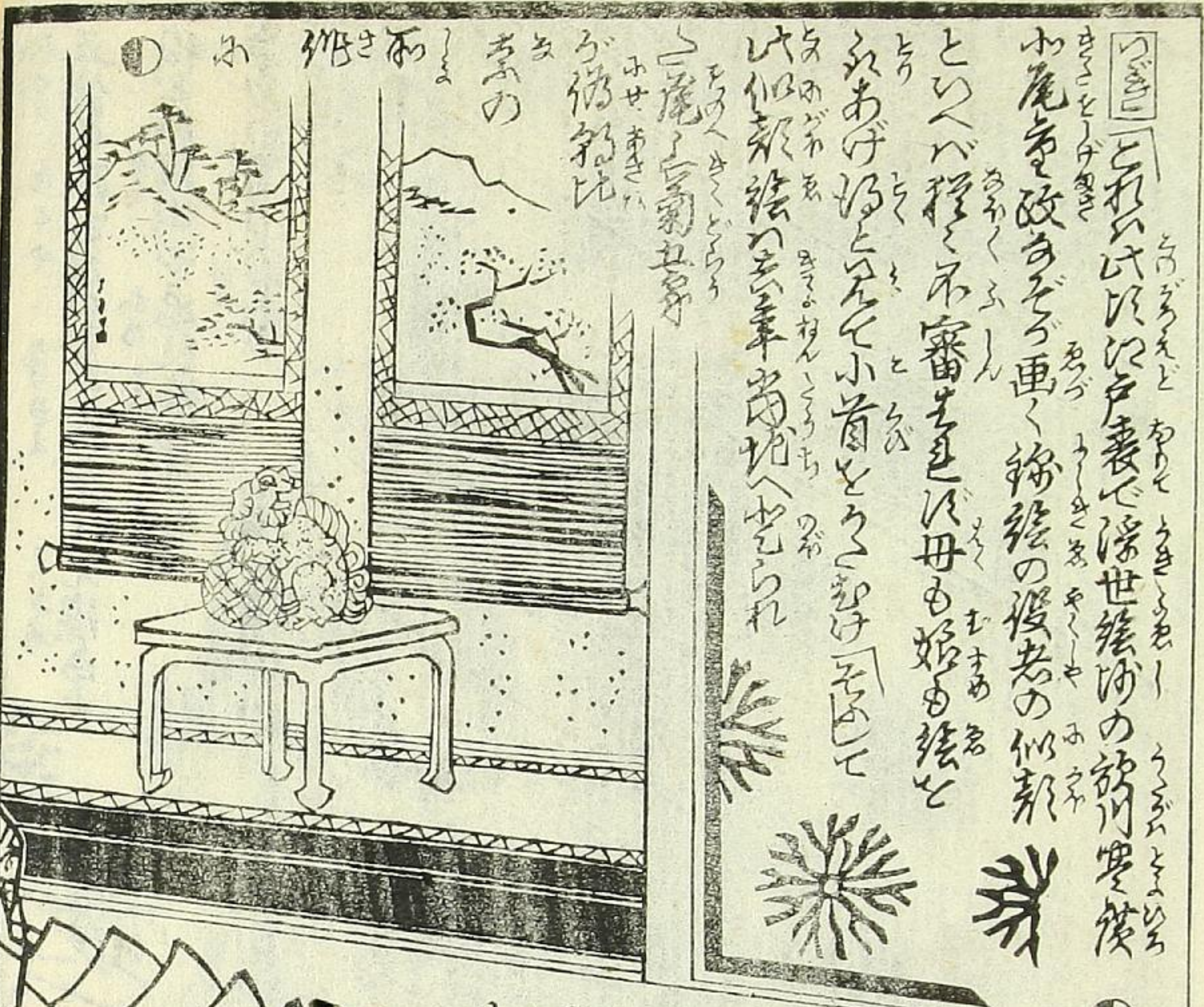
△ふ小女をて美ひを
限さ不審疑「頼ま出
どの何とりの
の源宗育の
あを桜年ハ十九三有
あまうまうまの女の人
ふうぬ
け不審
親の
お徳
あそ
小と後ハ
美ひは



五條の阿古屋と系流とくえ條と
ねとち神也と心は條とるむ
ははのあつもの
壯者その
ハハ橋の
指後
しに
はあ
はあ
べあ
えあ
かぢあ
目さる
とせと

僧役
口柄の滑
松者より不
後せハ母ハ

お徳よあまの源の
あを存てあつれと懐中
より出は後徳と母の
美ひは



とれは... (Vertical text in the upper right section of the right page, including the characters 'お尾' and 'おは')

出掛一枚法... (Vertical text block on the right page, starting with '出掛一枚法')

お母の... (Large block of vertical text on the right page, including the characters 'お母', 'おは', 'おは')



お母の... (Large block of vertical text at the bottom of the left page, including the characters 'お母', 'おは')

つぎ藤崎まゝこれに辺りも入りとあの持杉の娘をこれの
 内いけそはさへと受ぬらほさあ人の友の女まきくは色と
 妻をけりやと一旦控とらさる持杉はさういふお解
 めの娘はしてやもまねけけ外は傍にああ時又のやま
 の結核は小深の舟の水別神漕せんといふこと
 母の望まむとゆへ
 けけの持杉一人の
 送る物さす不豆か
 あひてふれはねの
 ある時いそぎ
 さあんと牛ふ
 第のきけ子
 底巧いまは七

三十五はして
 初めの葉間は意
 慢くはなみか
 見たり
 院代の後
 心も勤め
 一山の僧
 洗まらぬ
 程よりが女山の威



ゆい海く
 強く
 ようく人
 小も産つ
 密ふ
 さかし飛
 さらけ
 兼ていふか
 入揚る程ま
 うね日蓮宗の

あて七堂伽藍も
 英しく家根が流
 教を習く佐者も
 権とのい末さう
 の収納も多く何
 不定あき
 舟の上小
 自機とふか
 奪りてせじ
 折くい思ひ
 歩みの藤
 道い人目
 と怪る壺か
 小りも出入の若
 七と府ふ故その
 後及と



お袖男子と産む是後
 尾上刃之助とある
 次編み審りなり

このよふに寝てくると

昔の頃の湯やふ

来る彼般血着

湯でんが

あぞ

と

あやふ

しこの湯は揺ゆ内外

とも打あけて

あやせが

大のりのやまら

とせーがは夏の思はるも烈

しく我々の後るの涼と

△泡も宜きる多義なりのしちか性

とあひて倍倍小知れ

あれとあぞと云うる

とあねが母のおやせの

後りあやうる大志の

院代をも

○そのあ

ついでと添一

◇ 初る

がたう田條河系をぶら

つれふ

つらむけ

家小多

あねが

下一も

あつぬ

喋じ

さふ

ちのま

母も娘

も酒と

と

▲一夜と船す

こもあいが

とふ

あつぬ

あつぬ

あつぬ

あつぬ

あつぬ

あつぬ

あつぬ

あつぬ

あつぬ

あつぬ

あつぬ

あつぬ

あつぬ

あつぬ

あつぬ

あつぬ

△念もあつぬと云うる

あつぬと云うる

あつぬと云うる

あつぬと云うる

あつぬと云うる

あつぬと云うる

あつぬと云うる

出度控



戒とハ
細りあつた
一夜の枕さかへ
せしは是熱縁
のまわあを後と
まで因果をひく
是れもあき

⊠本締めも一枚
つら引るひ

●ひきうき

父が條のひと
糸巻子頼
おろこあまこ
外小女房の
行儀のそ

⊗梅香が
仕送りやて父後七が

生も心不飲
まされ



一どい
は舟あり
おれ甘んる
進めといひ
あから生糸
梅香が
舞とありて
月さる
送り物
さへ細き
桐りの
たそく
小あり

⊠父が腰角のあ
たる夜加る能

ねざな
藤沼の合快ふ飲
わくと養せの

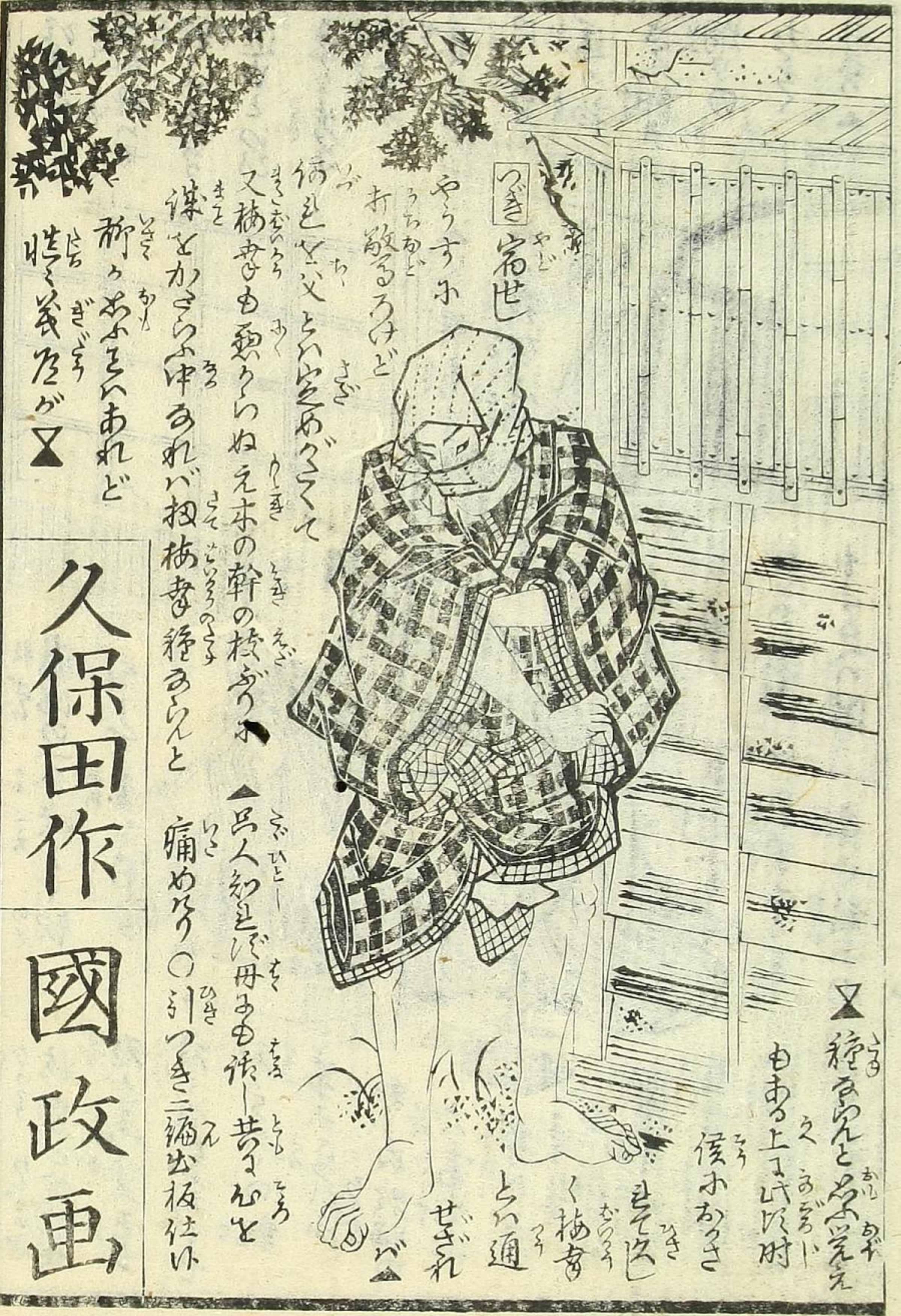
梅香と院付
及が養食とも
後とあれどおせ
がさそくの執
案小母は小

けは
やすくて
ぶらやう
時の足扱
もさへハ

⊙結ふ
取後ありと
妻や娘小

お神のりり後
並のそと
おれは
おれは
おれは

次へ



東京區分町村一覽

鹿兒島英銘傳二冊

大日本府縣郡名表

諸國大合戦仇討本

年數早見年代記

同・粉色入

年數早見一枚摺

昔は家小本類
日色入 表あまく

分

出版御届明治十年十一月十九日
和漢洋書籍
東錦繪地本

問屋

第一 芝居愛宿下四丁目二番地
編輯人 久保田彦作
東京東區本町日本橋通二丁目十九番地
出版人 大倉孫兵衛

